

優秀演題抄録

17 生活の中で機能する手を獲得する ～補助手獲得に向けた Activity の段階付け～

【演 者】木村 奈保美 【所 属】神立病院

【共同演者】西 マナミ（作業療法士）

【キーワード】脳血管障害、知覚運動アプローチ、両手協調動作

【はじめに】

利き手に重度麻痺を呈した症例を担当した。症例は、これからの主婦業の再獲得や復職に向けて、麻痺側手が生活の中で少しでも使えることを一番に希望されていた。しかし、補助手獲得に向けた両手活動練習では、視覚優位の非麻痺側が先行した代償パターンにより、麻痺側上肢手が生活の中で機能することは困難であった。そこで今回補助手獲得に向け、両側活動の特徴を考慮した積極的な知覚運動経験を段階付けた結果、若干の変化が得られたため考察を加えて報告する。なお、発表に際してご本人の承諾は得ている。

【症例紹介】

50 歳代女性。左被殻出血、右片麻痺。現病歴：勤務中に右半身に力が入りにくくなり呂律障害が出現。当院外来を受診し上記診断される。性格：「ちゃんとしなきゃ」と責任感や正義感が強い。努力家。HOPE：少しでも手が使えるようになりたい。

【評価】

改訂長谷川式簡易知能評価スケール 30/30 点。機能的自立度評価 114/126 点。歩行・入浴で減点。BrunnstromStage(以下、BrS)麻痺側上肢・手指Ⅱ。表在深部感覚軽度鈍麻。麻痺側上肢の日常生活参加状況はほとんどみられない。参加させようとするも努力的操作に伴う連合反応が出現。

【問題点】

活動場面では視覚優位となりやすく、末梢からの知覚運動経験が成立しない。そのため非麻痺側上肢手の過剰な運動と、体幹・肩甲帯周囲筋の低緊張による固定的姿勢パターンにより、麻痺側上肢は手指を中心とした連合反応が出現しやすい。

【目標】

短期目標：薬包を両手で切る、麻痺側手で本を支えておける、食事中に食器を持つ。長期目標：家事動作（調理、掃除活動）の中で麻痺側上肢・手の補助的使用獲得。

【プログラム】

①肩甲帯のアライメント修正②タオル操作③お手玉操作④新聞紙操作

【結果(2 週間の介入)】

BrS 上肢Ⅱ手指Ⅲ。薬包を切る際のつまみ動作。また連合反応が出現せずに本を押さえておくこと、食器(納豆の容器)を把持して中身を混ぜることが可能となった。

【考察】

生活の中で機能する手を獲得するために、両側活動におけるアクティビティの段階付けとして①空間的、②両側性、③対象知覚の要素に着目して介入を試みた。その中で、セラピストは常に姿勢制御と末梢の運動制御との関係を考慮して症例の動きを誘導し、反応を引き出していった。結果、末梢からの知覚運動経験が成立したことで、随意性の向上には至らなくとも、感覚器官として機能する手である『補助手』の獲得が可能となり、押さえ手や支え手として日常生活で生かされる手に至ったと考える。

